まちじゅう図書館によるまちづくりに関する研究
―群馬県太田市・長野県小布施町を事例に―

1882023　小林　芽依
指導教員　　大原　一興教授　　藤岡　泰寛准教授

1. 研究背景

これからの図書館のあり方は、従来のような読書のための利用だけでなく、地域の課題解決の支援を重視し、多様な資料を提供するものである。そのためには、図書館だけで活動するのではなく、地域の行政機関や民間団体と連携し、お互いの資源とノウハウを活用して、資料収集、広報などを行うことが必要となる。[1]

現代において、公共図書館と町の関わりはさらに欠かせないものとなるだろう。その中で、町に図書館が分散したような「まちじゅう図書館」という活動がある。本研究では、個人・飲食店・カフェ・酒屋・銀行などの一角に仕事に関係する本やオーナーの趣味の本を並べ、訪れる人と本を通しての交流を図る「まちじゅう図書館」に着目する。

2. 研究目的

まちじゅう図書館の活動実態から、その現状・活性度合いとその形成要因などを考察し、今後の展望を探ることを目的とする。

3. まちじゅう図書館について

おぶせまちじゅう図書館（2011～）は、小布施町立図書館・まちとしょテラソの建設当時に設計者から提案された、本を通じた交流の場づくりである。小さな図書館で、すぐに本棚はいっぱいになると考えられ、町の規模も小さいということから、町すべてに本棚を置いて、町中を図書館に例えようというものだった。当初は図書館が本を提供し、どこでも借りられてどこでも返せるといった構想だったが、それを実現する予算がなかったために現在の形となった。[2]

その後、群馬県太田市（2017～）や香川県琴平町（2017～）など、全国で同様の活動が試みられてきている。

4. 調査概要

4-1. 調査 1

群馬県太田市において、まちじゅう図書館の参加館 37 館中 13 館を訪れ、利用状況、課題、今後などについて各館長と市の担当者にヒアリング調査を実施した。調査館は美術

表 1　太田市の調査概要と結果

店舗名 （形態）	参加理由・経緯	まちじゅう図書館の利用者	スタンプラリーなどの効果	店舗のイベントの有無	図書目的の利用の有無	これからも積極的に参加したいか	太田市の特徴	まちを歩く頻度
Café　タイ夢 （カフェ・コーヒー）	話を聞いて自ら参加	今までで4,5組 待合の時の利用もほぼない	あまりなかった	全くない	全くない	ややそう思わない	スバルのまち	週に数回
焼そば専門店もみの木 （食事）	市の提案	待合の時の利用もほぼない			全くない	ややそう思う	昔の商店街は賑わっていた 昔は北口と南口でそれぞれ賑わっていたが今は差がある	
富士スバル株式会社太田店 （メーカー）	市の提案	雑誌や新聞はよく利用	少しあった	たまにある お祭りでグッズ販売やスバル車展示など	全くない	そう思う	災害が少なく住みやすく、穏やかな気質 工業都市 昔より衰退し、今は郊外化	月に数回
花の寺　常楽寺 （寺院）	市からの提案	まちじゅう図書館としてはない	あまりなかった	よくある 書道の教室や展覧会	あまりない	そう思う	大型店の進出で小売業が衰退 昔は地域によって文化的な特徴などがあった 新しい文化が生まれれば良い	ほとんどない
山崎酒造株式会社内山崎文庫 （酒蔵）	話を聞いて自ら参加	まちじゅう図書館としてはない	あまりなかった	よくある 味噌づくりや工芸などのWS	よくある	そう思う	中途半端 素材はあるが、観光などの発信力が弱い スバルに頼っている	月に数回
アトリエみちのそら （ブックアトリエ）	話を聞いて自ら参加	まちじゅう図書館としてはない	あまりなかった	よくある 1ヶ月ごとに展示や作家さんのサイン会など	よくある	ややそう思う		年に数回
クルンモット （食事）	話を聞いて自ら参加	待合の時に利用 絵本は子供の興味を引く	少しあった	あまりない	全くない	ややそう思う	工業都市でトラックが多い 外で遊ぶことや歩くことは少なく、車が離せない 商店が後々なくなりそうで駅前の将来が不安	年に数回
サン工房写 （写真館）	市の提案	紹介すると利用 （記念撮影や土日などの繁忙期）		あまりない	全くない	ややそう思う	工業都市で、商業は疎か これといった特徴がない	月に数回
万徳　本店 （和菓子屋）	話を聞いて自ら参加	月に数人	あまりなかった	全くない	全くない	ややそう思う	昔は宿場もあった 賑やかではない スバルきっかけで工業のまち	
新田パン （パン屋）	市の提案	当初はいたが、今は月に数人 申告制で貸出もする	少しあった お客さんの増加	たまにある イベント・大型店への出店や限定パンの製作	全くない	そう思う	住みやすい 商店街は店舗がどんどん減少 工業町	月に数回
横山呉服店 （呉服店）	市の提案	1ヶ月に1人ほど 鉄道好きの人が多い	あまりなかった	全くない	たまにある	そう思う	流行りもの好き スバル・富士重工の子会社が多い 個人店が衰退し、大型スーパやネットが繁盛	ほとんどない
テクノプラザおおた （市の文化施設）	市の提案	学生が月に数人 開館当初は空間利用もあった	ややあった	たまにある お祭りに合わせて開放 桜を見る会で地域交流	あまりない	どちらでもない	車社会 商店街が衰退して郊外の大型店が繁盛 個人店でも繁盛しているところはあるが行政頼み	月に数回
太田行政センター本陣ホール （市の文化施設）	市の提案	まちじゅう図書館としてはない		たまにある 隔年で作品展 絵画教室やヨガ教室	あまりない	ややそう思わない	製造業（スバル） これといった特徴がない 災害が少なく、子ども政策がいいため子育てしやすい	ほとんどない

表 2　小布施町の調査概要と結果

各館の本の数・ジャンル	まちとしょテラソのイベント	まちじゅう図書館の利用者数	まちじゅう図書館のイベント	現状	課題	小布施のまちの特徴
まちじゅう図書館への指定や管理はせずに個人の趣味に任せた上でジャンルなどの把握をしている	図書館としての運営や企画 ・企画展や子どものワークショップ ・作家さんとの企画 ・移動図書館（来年予定）	利用者数は不明 まちじゅう図書館の話を目的にまちとしょテラソを訪ねてくる方は毎月いる（卒論や行政・自治会の方など）	一度もない	現在の町への影響はわからない 本を通して会話が弾めば良いとの思いで行っている 元々はスタンプラリー形式だったが、現在は自主性を大事にしている	存在するだけになっている オープンガーデンと連携はどうか ：図書館の毎月約140冊の除籍本を持ち帰り自由で縁側に置く 駅テラソの延長としたい 本との出会いになれば良い	オープンマインドの人が多く、新たな取り組みに対して拒むことが少ない 新しいことに積極的で、町をよくしたいと思っている人が多い

館図書館のまちじゅう図書館担当の方の助言のもと、本の種類が特徴的であったり、意欲的であったりする感を中心に選定した（2021 年 11 月 30 日～12 月 2 日）。〈表 1〉

4-2. 調査 2

小布施町立図書館・まちとしょテラソの利用状況やまちじゅう図書館の現状などについて館長にヒアリング調査を実施した（2021 年 12 月 27 日）。〈表 2〉

5. まちじゅう図書館の現状

太田市においては、ヒアリング項目の、まちじゅう図書館の利用者数、スタンプラリーなどの企画の効果、から現状を調査した結果、現在の利用率は高くなく、企画の効果や交流についても多くの館では実施していないという回答であった。しかし、本を置いたことによって同じ趣味を持つ人と長い付き合いが生まれた、新たな顧客を獲得した、などというケースもあった。まち歩きという点では、車社会ではあるが、健康や散策という理由で歩きたいという意欲はあるようであった。また、まちの特徴として富士スバル重工業による自動車産業を中心とした工業が盛んだと答える人が多く、まちに対する誇りがみられた。

小布施町では、町民の希望でつくられた図書館だということもあり、図書館としての活動は盛んに行われている。だが、まちじゅう図書館としては存在するだけになっているということが挙げられた。しかし、消極的な意見は少なく、「存在しているだけ」ということを「あった方が良い」と捉えていて、図書館活動も含めた今後の展望が多くあった。

6. まちじゅう図書館の形成・活性の要因

6-1. おおたまちじゅう図書館

①運営主体の違い

太田市のまちじゅう図書館には公共の施設も含まれている。その点に着目し、運営主体が公共か民間かでまちじゅう図書館としてどのような差があるかを分析した。

【参加理由】公共の館では、「市の提案があったから」という参加理由しか見られなかったが、民間の館では、「市の提案があったから」のほかに「知り合いに話を聞いて自ら参加した」という意見が見られた。

【各館のイベントの有無】民間の館のイベントは、お店としての本業や宣伝のためであるものがほとんどである一方、公共の館のイベントは、元々まちのための施設であるという理由もあるが、地域との交流を図るイベントがほとんどであった。

【今後の参加意志】民間の館ではこれからも積極的に参加したいという意見が多くみられた一方、公共の館では普段の活動としては地域にひらいたものが多いものの、これからも積極的に参加したいという意見がみられなかった。

②イベントの有無による違い

イベントがある館では、図書利用・スタンプラリーの効果・まちじゅう図書館をきっかけとした交流・来店のどれかで良い結果がみられた。

6-2. おぶせまちじゅう図書館

小布施町の特徴として、オープンマインドの人が多く、昔から、新たな取り組みをするときに拒むことが少ない。新しいことに積極的で、自分ごととして取り組み、町をよくしたいと思っている人が多いということが挙げられた。

7. 今後の展望について

太田市では、地域に対してのイベントがある方が積極的で、特に地域に対しての意識は民間の方が高いと思われる。よって、運営主体と地域へのイベントがまちじゅう図書館の活性に起因しているといえる。このことから、精力的な館の絞り込みによって活性化を目指せるのではないかと考えられる。

また、太田市の地域アイデンティティとして多く挙げられた、工業都市・富士スバル重工業のまち、ということに着目し、まちじゅう図書館の企画に、太田市の工業の歴史などを盛り込むと、より活性化が期待される。

小布施町では、住民の気質を生かした別の取り組みとしてオープンガーデンがある。このオープンガーデンと連携できないかなどと館長は考えているという。図書館で毎月 140 冊ほどの除籍本があるので、持っていっても良い本を縁側に置いたらいいのではないか。「駅テラソ」という、駅に持っていっても良い本を置いて旅のお供に持っていってもらうという取り組みを現在行っているので、その延長でできれば良い。

7. 結論

小布施町も太田市もまちじゅう図書館の現状としては、存在しているだけで利用率は高くない状況であったが、本をきっかけとしたつながりやまちに対する熱意は見受けられた。そのため、まちじゅう図書館の形成・活性に起因しているものやまちへの誇りとなっているものに着目すればより活性化が期待される。

まちの特徴やまちじゅう図書館の形成・活性の要因がまちによって違うように、そのまちに合ったまちじゅう図書館の在り方があり、評価の仕方も様々である。現在、まちじゅう図書館は全国に広がっているが、どの地域でも、そのまちに合った在り方を見つけることが重要であるといえる。

【謝辞】

本論文の作成にあたり、ヒアリング調査及び資料提供などにご協力いただいた、おおたまちじゅう図書館の参加館方々、太田市美術館・図書館の職員の方々、小布施町立図書館・まちとしょテラソの職員の方々に感謝の意を表し、ここに厚く御礼申し上げます。

参考文献

1.これからの図書館の在り方検討協力者会議(2006),「これからの図書館像」
2.花井裕一郎(2014),「『本がある』交流広場、まちじゅう図書館」

本稿は令和三年度（2021年度）建築学教室卒業研究梗概集（横浜国立大学建築学教室、2022年3月24日）から転載したものである。